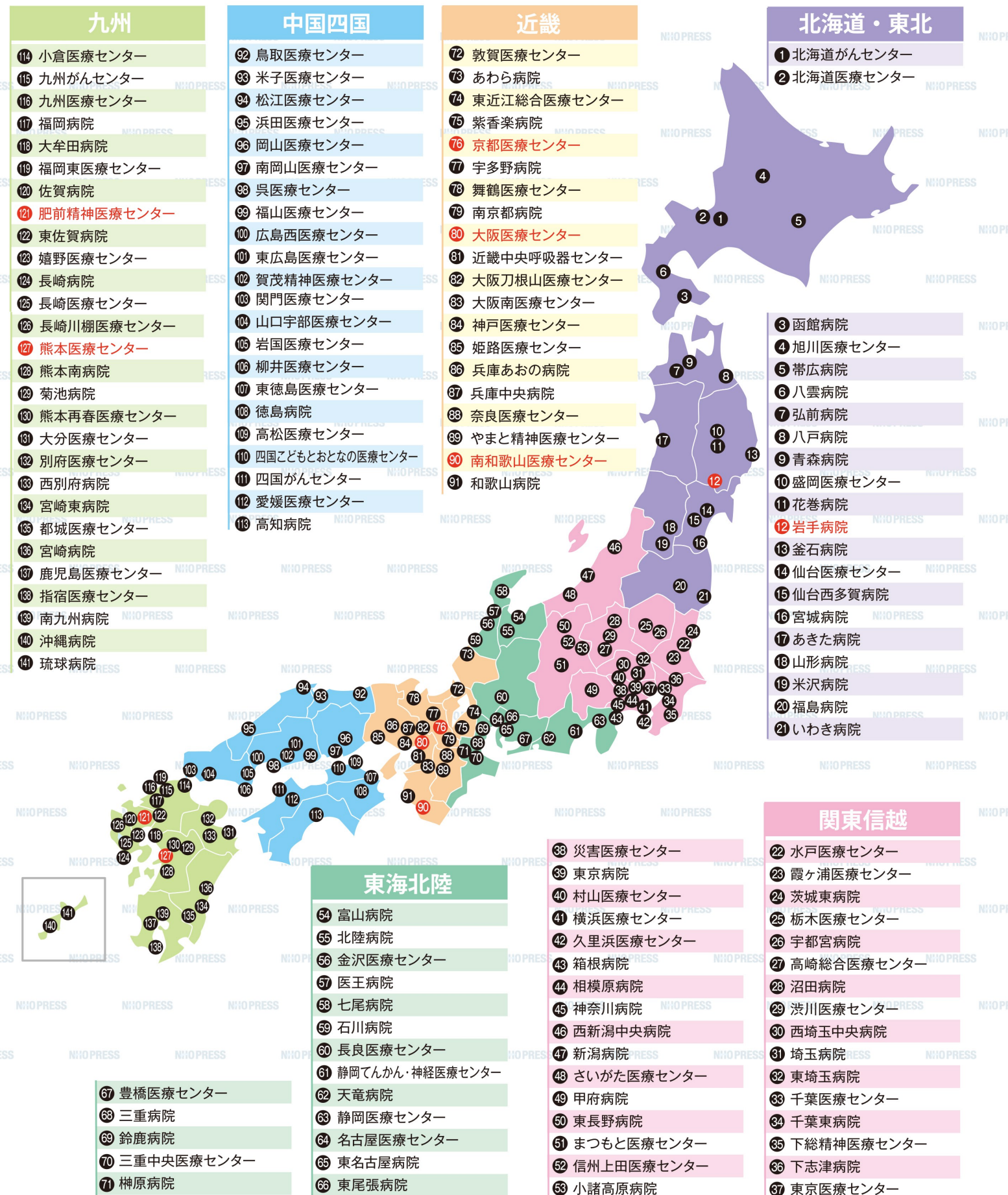


# 全国141の病院ネットワーク

※赤字は本号に掲載している病院です(今後NHO PRESSで各病院を紹介してまいります)

(2019年4月1日現在)



# NHO PRESS

National Hospital Organization

vol.10  
2019 Spring

特集 医療を“もっと安全に”提供するために  
医療安全相互チェックの取り組み

特集 01-05







特集

feature

## 医療を“もっと安全に”提供するために 医療安全相互チェックの取り組み

国立病院機構(以下、NHO)は、医療安全対策の一つとして「医療安全相互チェック」を継続的に行っています。これは他のNHO病院の目線で医療安全対策の現状を評価し、医療安全対策の標準化を図ることで、患者さんの安全を確保し、安心して診療を受けていただけるようにするためのものです。京都医療センターで実施されたラウンド(視察)を通して、どのような取り組みがなされているかをお伝えします。



### “相互チェック”体制を構築

NHOの「医療安全相互チェック」(以下、相互チェック)は、NHOのどの病院でも安全な医療を提供できるようにすること。つまり、医療安全対策の標準化を図ることを目的に、2011年度から試行し、2013年度から本格的にスタートしました。

試行にあたり、各病院の医療安全対策の現状を客観的に評価するために、医療安全相互チェックシートを作成しました。そのチェックシートを活用し、全てのNHO病院が同じ視点でチェックを行うことが可能となるなど、医療安全対策の質の均一化に向けて、病院間で相互チェックを実施する体制を整えました。

自院および他のNHO病院が評価することで課題が明確になるばかりでなく、良い取り組みを吸収することもでき、さらにはNHO全体での医療安全の向上を図るとともに、医療の質の向上にもつながります。また、指摘すること・されることによって医療安全に対する意識も、連携体制も一層強くなります。

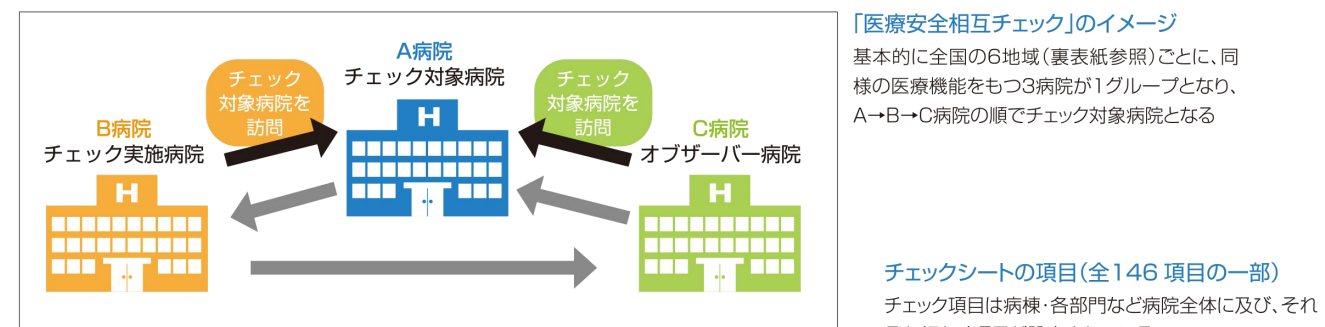
2016年度からの3年間は医療機能別の相互チェックを行い、全国に141ある全てのNHO病院で実施しました。

### 3つの病院で実施

NHOの相互チェックは、3つの病院で1グループ(以下、相互チェックグループ)を作り、それぞれの病院が「チェック実施病院」「チェック対象病院」「オブザーバー病院」のいずれかになり、順番にチェックを受けていきます。「オブザーバー病院」は、チェックをする側・受ける側の両方の視点をもって、必要に応じて助言などを行います。

チェック実施病院の主要メンバーは医療安全管理に従事している医師や看護師です。これらのメンバー全員(10数名)でチェック対象病院をラウンド(視察)し、医療安全対策に関連した146の項目をチェックしていきます。ラウンドの最後には、意見交換会と講評が行われます。

そして後日、チェック実施病院が報告書を作成し、チェック対象病院に送ります。この結果を受けて、改善策の検討などを行い、改めるべきところは改善を図ります。同じ相互チェックグループ内では、これらの情報を、医療安全管理の向上に活用します。さらに、各病院で改善につながった事例はNHO本部を通じて、NHO全141病院で共有します。



### 医療安全相互チェックシート

| チェック項目                                                                             |                                                    | 自己評価 | 相互チェック |
|------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|------|--------|
| 2 患者認識対策について                                                                       |                                                    |      |        |
| チェックの視点: 患者認識対策としては、患者取り違え防止、治療部位の間違い防止、検体等の取り違え防止、手術前のタイムアウトなどの誤認防止策の導入と実施状況など評価。 |                                                    |      |        |
| 29                                                                                 | 各部門では、それぞれに患者認識を防ぐための具体的方法が示され、実施されている。            |      |        |
| 30                                                                                 | 氏名確認のために、患者さんにも名前を名乗っていただき患者参加型の対応がとられている。         |      |        |
| 31                                                                                 | 名乗れない患者を含む患者の認証については、IDバンドやバーコードシステムを使用する等工夫されている。 |      |        |
| 32                                                                                 | 指示内容の確認および照合は、指差呼称を実施している。                         |      |        |
| 3 インフォームド・コンセント                                                                    |                                                    |      |        |
| チェックの視点: 説明すべき内容がわかりやすく患者に説明されていること、また、同意を得る際には患者の意思が尊重されていることを評価する。               |                                                    |      |        |
| 33                                                                                 | 説明と同意についての基本的な取り組み姿勢が明文化されている。                     |      |        |



## 「医療安全相互チェック」の実施例

～京都医療センター(京都市)～

### 対象部門を訪ね、146項目をチェック

2019年1月31日、京都医療センターにおいて相互チェックが行われました。この事例では、「チェック対象病院」は京都医療センター、「チェック実施病院」は大阪医療センター、「オブザーバー病院」は南和歌山医療センターです。

午後1時、京都医療センターの担当者から、進め方の説明が行われ、続いて大阪医療センターと南和歌山医療センターのメンバーが2班に分かれ、ラウンド(視察)を開始しました。

チェック対象部門は「救命救急センター」と「循環器内科・血管外科・心臓外科・脳神経外科・神経内科・内分泌代謝内科・整形外科の各病棟」、「医療安全／臨床工学科／手術室／栄養部門／リハビリ部門」、さらに「感染管理体制／薬剤部門／放射線部門／臨床検査部門」、と多岐にわたります。医療安全相互チェックシートにある146項目が一つずつチェックされ、各部門では細かい質疑応答も繰り返されました。



代表して挨拶する  
京都医療センターの  
小西院長

病室のベッドに使用されているピクトグラム(絵文字)。看護師向けの表示で、こうしたピクトグラムを使って転倒事故防止のための注意喚起を行ったところ、転倒件数が減少。ラウンドではその成果も説明された



チェックシートを使っている様子

実際の評価では、項目ごとに「○」「×」「NA(非該当)」のいずれかが記入される

### 互いにチェックし合うことのメリット

午後4時45分からの講評では、ピクトグラム(単純にデザイン化された絵文字)を活用した京都医療センター独自の取り組みや、医療安全に対する意識の高さが評価されていました。

同センターの小西郁生院長は「包括的あるいは個別的、詳細なご指摘をいただき、感謝します。当院は京都府南部の基幹病院として高度急性期医療を担っています。ご指摘のあった点を改善しながら、さらに高度で安全な医療、親切的な医療を目指し



電子カルテシステムをチェックしている様子

システム上、ハイリスク薬(特に管理が必要な医薬品)は他の薬とは違う色で表示される。そのため、識別が容易になった

て頑張っていきます」と締めくくり、4時間あまりに及んだ相互チェックが終了しました。

この相互チェックグループでは、2019年2月までに3病院の相互チェックが終了しています。このようにNHOは全141病院で相互チェックを繰り返し、その結果や成果を共有することで、医療安全のさらなる向上に努めています。こうした活動は、何よりも患者さんに提供される医療自体の質を高める効果をもたらしています。

※この医療安全相互チェックは、評価を得て、昨年4月から国の診療報酬制度に取り込まれました。さらなる医療安全対策の標準化を図るため、2019年度から体制を変更しています。



臨床検査部門での質疑応答

検査機器などのチェック後、医療安全に関する各種マニュアルも用いて、部門担当者への質疑応答が行われた



救命救急センターでの  
チェックの様子

一刻を争う症例が多い救命救急センターでは、項目のチェックだけではなく、器具や薬剤なども目視で確認し、活発な質疑応答が繰り返された





【チェック実施病院】大阪医療センター  
関本貢嗣 医療安全管理部長

電子カルテシステムの画面で、ハイリスク薬(特に管理が必要な医薬品)が他の薬と異なる色で表示されていました。これは非常に有効な対策です。アレルギー体質の方などに使用される造影剤(X線撮影で臓器などを見やすくする薬品)については、検査担当医だけでなく、主治医も積極的に管理している点も優れていたと思います。改善のために日々、意見交換を活発に行い、工夫をされていることを窺い知ることができました。



【チェック対象病院】京都医療センター  
白神幸太郎 診療部長(医療安全担当)

他者の目が入ると、私たちが気づかなかった点が多々あることが明らかになってきます。一方、安全対策のためのアプローチはいろいろあってしかるべきで、私たちが独自に行っている安全対策は、チェック実施病院とオブザーバー病院の皆さんの参考になったと思います。より高いレベルの意見交換ができました。相互チェックの継続は大変ですが、互いに良い刺激となり、続ける価値があります。4時間に及ぶ相互チェックはとても有意義なものとなりました。



【オブザーバー病院】南和歌山医療センター  
服部雄司 副薬剤部長兼医薬品情報管理室長

私も京都医療センターの方々の医療安全に対する意識の高さを感じました。転倒・転落防止のための取り組みは重要で、当院も力を入れています。防止策をはじめ、万一、患者さんが転んだ場合も、当直医や主治医などドクターの方がしっかりと連携されている点が優れていると思いました。当院での相互チェック実施への貴重な体験となりました(取材時は実施前)。

## 「QC活動全国最優秀賞」 受賞の盾と賞状



京都医療センターでは、院内感染対策チーム(ICT: Infection Control Team)が、「抗菌薬適正使用の試み」というタイトルで2013年度にNHOのQC活動全国最優秀賞を受賞している。NHOのQC活動とは、具体的な業務課題の解決に取り組み、品質の適正保持・効率化・改善などの対策を考え、実践する活動。「できることから始めよう!」をスローガンに「QC活動奨励表彰」制度を創設し、医療安全をはじめ、医療サービス、経営改善に関わるテーマについて、職員から創意工夫を凝らした取り組みを募集、表彰している

# スペシャリストの素顔

現場で活躍するさまざまな職種をご紹介します。



## 医療安全管理係長

院内の各部署と連携しながら、病院全体の医療安全管理体制を整えていく医療安全のリスクマネージャー。組織横断的な業務を行う実働隊として、患者さんと接する時間が長い看護師長が専任で務める場合が多い。

大阪医療センター(大阪市)  
医療安全管理係長(看護師長) 角野 郁子さん

「点眼薬の注意点」に関わる病棟の勉強会に同席した角野係長。事故を防止するのはあくまで現場というスタンスで、「これまでどうしてた?」といった質問で理解度を確認する

## 医療安全を実現するためのポイントは?

医療安全において何よりも有効なのは、思わぬ事態が発生する可能性をいち早くキャッチし、事前に防止策を講じることです。私たちはその可能性をキャッチすると、必要に応じて関係する部署・職種を集めた組織横断的なグループを立ち上げ、防止策を検討します。また、各診療科の科長(医師)や看護師長などが参加するリスクマネージャー会が定期的に行われており、ここでも検討を重ねて新たな対策を実現していきます。

医療の現場は、細かなことまでマニュアル化し安全第一に努めていますが、手順の間違いなど、直接、患者さんに影響を及ぼす手前で発見している問題もあります。些細な問題でも、直ちに現場でそのシーンを再現してもらいます。現場では当たり前の手順でも、私たちは第三者的な目で判断できるので、間違いの原因に気づくことがあります。また、従来の手順のどこに問題があったのかをみんなで再確認できる機会になります。そして、新たな防止策につなげる際のポイントは“見える化”です。間違いが起こった場面とその前後の写真を新たなマニュアルに添付し、言葉だけではなく視覚でも訴えて再発を防止するのです。



## 医療安全の確保に欠かせないものとは?

何よりも院内の風通しの良さです。少しでも気になることがあれば、各病棟の看護師長が私たちに知らせてくれます。また、医師のリーダーシップも心強く、柔軟に対応する上で大きな力となっています。院内の円滑なコミュニケーションがスピーディーな行動につながり、患者さんの安全確保につながっているのです。

すべての医療スタッフは「患者さんに良くなってほしい」と願っており、目指すゴールは患者さんと同じです。医療安全を確保することは日頃の医療や看護の実践の中で立ち止まって考えることであり、コミュニケーションの大切さを発信していくことも、大きな役割だと考えています。



京都医療センターで行われた医療安全相互チェック(P01~05参照)に参加した角野係長。他の現場を見られる機会は貴重で、その現場での改善例を知ることは大いに参考となる

同僚の近藤副師長と対応マニュアルを確認する角野係長





## No.07 岩手病院

Interview  
斎藤 久美／主任保育士

# さまざまな人の思いを叶える 室内イルミネーション



柱に投影された動く雪の結晶。  
患者さんは結晶を追いかけようと  
自ら手を伸ばす



2018年度のイルミネーション。  
保育士たちが交代で担当し、イルミネーション  
の配置を工夫し、新しいものを買い足したりし  
て毎年趣向を凝らしている

病院にしながら、思い思いに光と音の共演を楽しめる空間。岩手県南部にある岩手病院（一関市）では、そんな空間が毎年生まれます。11年目を迎えたこの冬も、イルミネーションで彩られた部屋で過ごす人たちの姿が見られました。

イルミネーションというと屋外のイメージが強いですが、岩手病院のイルミネーションは屋内で実施されています。もともと重症心身障がい児（者）病棟の廊下で患者さん向けに実施されていましたが、入院中の患者さんだけではなく病院を訪れるすべての人の癒しになればと、いろいろな目的に活

用できる広い部屋で、実施されるようになりました。平日の午前10時から午後4時半までの間、この空間で過ごすことができます。

重症心身障がいの患者さんの場合、入院生活が長いことが多く、病室は生活の場でもあります。病室から出る機会を増やして、病院内であっても生活空間を拡大することが、このイルミネーションの目的の一つです。病室では反応が少ない患者さんでもイルミネーションを見ると、よく笑う・目の動きが激しくなる・声を出すといった、明らかな変化が見られるといいます。



また、リハビリテーションで訪れた患者さんにとっては、リハビリテーション後のささやかなご褒美となります。さらに、「もっと傍で見たい」と、自分の力で体を動かすことで、効果的なリハビリテーションにもなっています。

そのほかにも、相部屋の病室を離れてプライベートな時間が欲しいご家族、患者さんと落ち着いて話をしたい病院スタッフなど、訪れる人々の目的はさまざまです。



落ち着いた空間で、同じ景色・時間を共有することは人間関係において大切で、癒し効果だけではなく、そうした空間を提供することが室内イルミネーションの目的だと、斎藤保育士は笑顔で話してくれました。

岩手病院のイルミネーションが11年も続いている背景には、訪れる人々のこうしたさまざまな思いがあり、その思いが少しでも叶う場所だということがあるのでしょう。

## 患者さんを癒すセラピー用アザラシロボット

センサーと人工知能(AI)により人の呼びかけに反応し、動物を真似た愛らしい行動が人の心を和ませる。認知症患者さんや自閉症の子ども向けに導入される場合が多いが、岩手病院ではいち早く重症心身障がいの患者さんに導入した。自ら頬ずりしたり、見つめあうだけで笑顔になったりと、明らかな変化が見られるという。安くはないロボットを購入した当時の事務長の苗字にちなんで、「ののちゃん」と名付けられている



## 岩手病院 (岩手県一関市)

許可病床数250床。地域医療と政策(セーフティネット)医療を柱とする拠点病院。特に重症心身障がい児(者)病床は150床を数え、室長・児童指導員・保育士の計9名が療育指導室で重症心身障がい患者さんの生活援助や訓練などを行っている。



毎年恒例の点灯式の様子。患者さんをはじめ、看護師や保育士、リハビリスタッフなどさまざまな職種が参加して賑やかに点灯のカウントダウンをする。写真は一昨年(2017年)の様子で、院長がサンタクロースの帽子を被って登場することが恒例となっている





## セーフティネット医療

※結核、重症心身障がい、筋ジストロフィーを含む神経・筋難病など他の医療機関では体制の整備、経験、または不採算とされることからアプローチが困難な分野の医療



医師・看護師・療養介助員・心理療法士・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・児童指導員・保育士・ソーシャルワーカーで構成されるチーム。スタッフの笑顔が患者さんを元気に、患者さんの元気がスタッフの笑顔の源となっている

# 高い専門性とチームの力で 患者さんを精神的安定に導く

～肥前精神医療センターの強度行動障害を呈する患者さんへの対応～

## 障害特性と環境のミスマッチが 引き起こす強度行動障害

肥前精神医療センター（佐賀県吉野ヶ里町）は精神神経疾患医療全般を担う病院です。家庭や福祉施設では対応困難な、強度行動障害を呈する重度知的障害や発達障害の患者さんに対応

できる、全国でも数少ない専門病棟があります。強度行動障害とは、自傷行為や食べられないものを口にする（異食）、他人を叩いてしまうといった行動が高い頻度で起こるため、特別な支援が欠かせない状態を指します。こうした行動は自閉スペクトラム症などの障害特性と環境のミスマッチによるもので、患者さん本人も困った結果、生じていることが多いのです。身体的

に問題がないため、走る・飛び出すといった突発的な行動を伴うことがあり、こうした行動を呈する患者さんを受け入れているのが肥前精神医療センターの専門病棟です。

強度行動障害を伴う重度知的障害や発達障害の患者さんへの対応には、専門的な知識をもつスタッフと、患者さんが快適で安全に過ごせる専用の病棟が必要です。このため民間の医療施設で対応することが難しく、患者さんのご家族にとっても、24時間自宅で世話をするのは大きな負担になることがあります。NHOでは、セーフティネット医療の一環として、そうした患者さんに対応できる専門の病棟を開設してきました。今では全国に9施設を数えますが、肥前精神医療センターの専門病棟は、その第一号です（1972年開設）。

## 日中活動（療育）・行動療法と チーム力で精神的安定に導く

専門病棟では患者さんに対し、日中活動（療育）・行動療法を中心とした医療や、看護・介護を多職種によるチームで提供しています。會田千重精神科医長（療育指導科長）によると、

強度行動障害のある患者さんは見通しが立たない環境ではパニックをおこしやすく、言語によるコミュニケーションが難しい方がほとんどといます。一方で、特定の作業や行動に強い関心をもつ傾向があるといい、作業や行動に集中している間は、落ち着いて過ごすことができるのです。このため、安心できる分かりやすい環境（部屋や物）で、同じ手順（構造化といます）で興味のある日中活動（療育）・行動療法を行うことが治療の有効な手段なのです。

患者さんが関心を持つ活動はそれぞれ異なるので、ある患者さんには手先を動かす刺繍を、別の患者さんには体を激しく動かすランポリンといったように、患者さんにとって精神的に安定する活動を見極めることが大切です。多職種のスタッフがそれぞれの専門性を生かしながら患者さん一人ひとり进行分析し、些細なことでも情報共有することで、患者さんが落ち着いて過ごせる活動を見極めていきます。望ましい行動には大いに褒めるなどして、強度行動障害の症状が現れにくい時間を長くしていくのです。

患者さんに合った治療と支援が、患者さんを精神的な安定へと導いています。



▲ビーズを順番に紐（ひも）に通す活動。視覚情報に強く反応する患者さんが多いため、作業の順番と終わりが目で見て分かりやすい作業が有効



▲療育訓練棟にはカラオケ室まである。大きな声で歌うことも楽しい活動の一つ（写真はスタッフによる再現で、曲目は中年の患者さんに人気があるYMCA）



療育訓練棟内にあるスヌーズレン室(スタッフによる再現)。  
光・音・匂いを組み合わせて心地よい環境をつくるス  
ヌーズレン室では、活発に行動する患者さんでも落ち着き、  
すぐに寝てしまうこともけっこうあるという



丁寧にきれいに仕上がっている患者さん作のスウェーデン  
刺繍。規則的な糸の出し入れを繰り返す刺繍は有効な活動  
になる。驚異的な集中力を発揮する患者さんもある



▲「知的障害のある子どもたちへの福祉と教育に、一生を捧げた糸賀一雄さんは、「この子らを世の光に」という有名な言葉を遺していますが、患者さんと過ごしていると、本当に光だと思ふことがあります」と話す會田精神科医長(左)は邦画好きで、お薦めは蒼井優・阿部サダヲ主演の「彼女がその名を知らない鳥たち」。  
青山瑞穂看護師(中央)は、「患者さんは体調をうまく伝えられません。体の不調が気分の変動につながることもあるので、全身管理に注意して、健康で気持ちのいい状態が続くように努めています」と語ってくれた。帰宅すると、3匹の愛犬が出迎えてくれるという。  
「患者さんの強みや特性を生かしながら、いかに楽しく過ごしてもらえかに心を砕いています」と話してくれた酒井英佑主任児童指導員(右)のビタミン剤は、自宅に作った小さな家庭菜園で過ごす時間。

## 蓄積された専門性と 経験を駆使した活動

肥前精神医療センターでは、長期の入院患者さん以外にも、特別支援学校などに通っている未成年の患者さんや、一時的に福祉施設で対応困難な患者さんの短期入院も受け入れています。また、治療により落ち着いて過ごせる時間が長くなった患者さんであれば、できるだけ住み慣れた地域で生活してもらえるように、患者さんの住まいに近い福祉施設などへ退院してもらうことにも積極的に取り組んでいます。病院は生活の最終的な場としてではなく、患者さんが地域で快適に暮らせるようになるための、中間施設的な考えに基づいています。

また、全国でもいち早く強度行動障害を呈する患者さんを受け入れてきた歴史があるので、蓄積された経験と高い専門性を生かし、福祉関係者や医療従事者の方へ研修を実施しています。こうした取り組みは福祉関係者と医療従事

者が互いのネットワークを広げることに役立っており、患者さんのご家族にとっても医療や福祉のサービスを利用しやすい環境づくりにつながります。

複数の関係者と連携を強化しながら、患者さんやご家族を支える地域の拠点としての役割を果たしているのです。



肥前精神医療センター(佐賀県神埼郡吉野ヶ里町)  
許可病床数 564 床

日本の精神科医療をけん引してきた基幹医療施設。全国に9施設(いずれも NHO)しかない強度行動障害を呈する患者さんの専門病棟を国内で初めて設置した(1972 年)。精神科医療従事者の育成にも努めている。



# 病院の管理栄養士が考えた 体が喜ぶレシピ

家庭でも簡単に作れる健康メニューを、ご紹介するこのコーナー。今回は熊本医療センター（熊本県）の福永麻希管理栄養士が紹介する、華やかで祝い事にピッタリな“すもじ”（ちらしずし）です。

## お好みの食材を加えて華やかに すもじ（ちらしずし）

旬の食材をトッピングして、歯ごたえも豊かに



写真は病院の「郷土料理の行事食」として提供された鹿児島県のすもじ

### 【食材】（1人分）

|     |          |          |   |        |           |
|-----|----------|----------|---|--------|-----------|
| すし酢 | ごはん      | 180g     | B | ごぼう    | 10g（ささがき） |
|     | 酢        | 20g      |   | にんじん   | 10g（1cm角） |
|     | 砂糖       | 7g       |   | 切干大根   | 2g（1cm長）  |
|     | 塩        | 1.8g     |   | たけのこ   | 10g（1cm角） |
| A   | 干椎茸      | 2g（1cm角） | C | だし汁    | 30cc      |
|     | きくらげ     | 1g（2cm長） |   | 薄口しょうゆ | 1g        |
|     | 薄口しょうゆ   | 2g       |   | みりん    | 0.5g      |
|     | 砂糖       | 1g       |   | かまぼこ   | 10g（1cm角） |
|     | みりん      | 1.5g     |   | 鶏卵     | 15g       |
|     | 干椎茸のもどし汁 | 50cc     |   | 食塩     | 0.1g      |
|     |          |          |   | 砂糖     | 1g        |
|     |          |          |   | 絹さや    | 適量        |

### 【作り方】

- ① ごはんとすし酢を混ぜ、冷ましておく。
- ② 干椎茸、きくらげ、切干大根を水で戻す。ごぼうは水につけ、あく抜きをし、かまぼこは湯通しする。
- ③ 干椎茸、きくらげにAを加え、汁気がなくなるまで煮詰める（濃い味）。
- ④ ごぼう、にんじん、切干大根、たけのこにBを加え、煮る（薄味）。
- ⑤ Cで錦糸玉子を作る。
- ⑥ ①のすし飯に③、④、かまぼこを混ぜ合わせ、皿に盛りつける。
- ⑦ 上から錦糸玉子と絹さやで飾り付け、完成。

### ポイント

鹿児島では「ちらしずし」のことを“すもじ”といいます。地酒を使用し、ほんのり地酒の香りが残るのが特徴ですが、今回は、一般的なすし酢を使ったすもじをご紹介します。干椎茸のもどし汁が味付けのポイントで、スナッペンどうや新ごぼう、たけのこなど旬の食材を入れることで、春気分を味わうことができます。ひな祭りや春先のお祝いごとは是非、ご家庭でお試ください！

### 栄養管理室のココがすごい



エスニック風な料理に挑戦！「初夏の糖尿病教室食事会」で提供された「スイカのポンチ」

栄養管理室では2018年から「ひと手間プロジェクト」に取り組んでいます。「郷土料理の行事食」もその一環で、九州各県出身の管理栄養士たちが、ふるさとの郷土料理を月1回のペースで患者さんに提供しています。他にも、「ホテルのモーニングメニューを病院で」「夏のデザート・ワゴンサービス」など、新しい取り組みはさまざまです。高橋毅院長をはじめとする職員と定期的に試食会を開催して、職員の率直な意見をメニュー改善につなげたり、熊本市内の有名ホテルの料理長に出汁の取り方を学んだり、「ひと手間加えて、さらにおいしく」への挑戦を続けています。



「ひと手間プロジェクト」の詳細はこちら！

### こんな食材が自慢です！



熊本といえば馬刺しが有名ですが、ほかにも自慢の食材・グルメが豊富です。たとえば晩白柚（ばんぺいゆ）。巨大な柑橘類で、直径20cm、重さ2kgほどにもなります。他にも塩トマト・からしレンコン・夏蜜柑・スイカ・だご汁・熊本ラーメンなどたくさんありますが、中でもお薦めは太平燕（タイピーエン）。たっぷり野菜に春雨が入ったコクのある麺料理で、まるでチャンポンのよう。長崎で生まれ熊本で育ち、当院のメニューでも大人気の太平燕を、ぜひ熊本でご賞味あれ！！

### 栄養管理室のみなさんより

熊本医療センターは熊本城の城内にあり、天守閣へは病院から歩いて5分ほどで行けます。春はお堀の桜が咲き乱れる、とてもいい環境です。熊本城は熊本市民の誇りであり、元気がもらえる象徴です。今はお城も元気を回復中ですが、ぜひ頑張っているお城を見に来てください。（四元 有吏 栄養管理室長）

私は鹿児島県出身で、熊本市民としてはまだ1年足らずですが、いたるところで市民が一丸となって復興に取り組んでいる様子を目にします。その姿から熊本の未来は明るいと確信しています。ぜひ皆さんもその姿を見に来てください。くまモンも待ってますよ。（福永 麻希 管理栄養士）



復興が進む熊本城の天守閣。きれいに修復されていく様子は、まさに熊本復興の象徴。ただ、城内のいたるところでは崩れたままの石垣が目につき、完全な復旧には20年もかかるという



熊本医療センター（熊本県熊本市）

許可病床数550床。  
「最新の知識・医療技術と礼節をもって良質で安全な医療を目指す」ことを基本理念に掲げ、専門性の高い医療を提供している。救急医療では救命救急センターを中心に、「1年365日24時間、断らない救急医療」をスローガンに病院全体で診療に対応。



### より良い紙面づくりのために、アンケートにご協力を！

※ご回答はメール（国立病院機構本部広報文書課宛）にてご送信ください。

※メールの本文に質問の番号（問1、問2など）と選択肢の番号または回答文を直接ご記載ください。



上記 QRコードから送信先メールアドレスを読み取れます。

問1. 性別・年齢、および今号をご覧になった方法を教えてください。

性別：1. 男 2. 女 年齢：（ ）歳

方法：1. （ ）病院で 2. 機構ホームページで

問2. 読みやすく、わかりやすい広報誌だと思われましたか？

1. 読みやすい 2. 読みにくい 3. どちらでもない

理由（ ）

問3. 興味をもたれた内容とその理由をお答えください。

内容（ ）

理由（ ）

問4. 今後、取り上げてほしい内容、テーマがありましたら教えてください。

（ ）



送信先 メール：700-info@mail.hosp.go.jp